



# 子供讃歌（一六）

倉橋惣三

## 一五大戦と幼児

### 1 地獄の樂園

空から火箭が飛んで来る。爆焰は人畜を焼き爛らす。こうした、なま／＼しい焦熱地獄の中で、おとな達が、或は怒り闘い、或は怖れ逃げまわつてゐる間にも、幼い子供は必ずその貴重な幸福を、楽しい遊びの場と、正しい導きによつて誰れかに保証されなくてはならぬ。それこそ、自分の生命を護るに次いでのおとなの責任である。責任など考へる前に至情である。この至情は常時にあつては、あたりまえであり、非常時においては必須の努力である。

彼は、若い日、コメニユウスの伝を読んで、此の教育者が、慌しい戦乱の間にも、寸地寸刻を惜んで、民族移動の森蔭や谷間に子供らを集めて、その教育に努力した話に感激したことがある。そうして、その已み難い児童愛の実行こそが、大著デダリチカマガナの教育原理以上に、此の教育者への彼の尊敬を深からしめてゐる。『この非常時に幼児のことなんか』といつた風の声が耳に聞えてくるたびに、コメニユウスもそうした無理解者の声に如何に多く妨げられたことだろうと、更めて思いやつたりした。

どこの役所からだつたか、幼稚園休園令が出た。通園途上の不安もある場合、一応の心づかいである。彼の幼稚園でも、速い通園者にはこの令が出る以前から随意休園を勧めた。しかし幼稚園は非常時でないから、戦時保育所と名をかえろというおふれは、彼の理解し難いことであつた。保育所という看板ならいゝが、幼稚園ではいけないとい

う考え方が、納得できなかつた。殊に、近くの子らのためには、建て込んだ町家よりは、広い園庭をもつ幼稚園の方が安全であつた。登園児の数の少なくなるにつれて、幼児達の一人々々を見るおとなの手は、それこそ非常時の忙しい母よりはゆき届いてゐた。それでも、幼稚園に頂けておくのが心配な家庭は休ませるがよい。が、現に幼児らは戦争をよそに楽しく遊んでゐる。運動具がある。おもちゃがある。友達的笑声がある。先生方の笑顔がある。砂場に近しい小山の下には防空壕が掘つてある。遊戯の時に避難演習の一斉行動も演習してある。幼児達の間では、ゆうべの警報の噂について、わざとおびえあうような地獄童話も行われるが、それだから、先生はつとめて樂園童話で、小さい不戦闘員の可憐な魂から、地獄のおびえを除くことにつとめる。——彼は巻脚絆に鉄かぶとの身ごしらえ、先生方はモンペに防空頭布のいでたちを守り、バケツには水を張り、砂を盛り室毎に火たゝきを立てると共に、三角巾入りの薬かばんを備えることを忘れず、幾日分かの貯蔵食糧を積み重ねて、身を以て幼児を護る覚悟をしながらも、幼児らには、非常時だからこそ常時以上のなごやかな楽しい幼稚園を与えることにつとめる。

兎に角く、しまいまで幼稚園の名をかえなかつたことは、彼のひとり喜んでゐるところであつた。その間、主事としては文部省に幾度か足を運ばなければならなかつたが。

さて、原子爆弾の今日、あんなことをと笑止になる点もあるが、無戦争の他に、幼児を絶対に護る途はありそうもない。

## 2 敗戦後の御近所幼稚園

振りかえつて思えば、その頃、戦争は実にもう敗戦に極つていたのであつた。幼稚園の建物も、より大切な官庁の事務のために占領されるに至つた。これが彼の被占領（内輪ごとではあるが）を経験した初めであつた。そうして、遂に国そのものが占領せられるに至つたとき、幼稚園は国内的に荒されたまゝ、戦勝者によつて子供のものとして許された。

が肝心の幼児等は離散してしまつて、開園の通知の出しようもない。彼等の多くは、東京の外にそかいたまゝである。その中には、幼稚園の罹災しないことを伝え聞いて、子供が早く帰りがつてゐるといふたよりを寄せるものも少くはなかつた。彼と先生達は、彼等戦争欠席児の無事を喜ぶと共に、その帰園を待つた。

しかし、この幼稚園に一日も早く提供せられなければならぬ幼児は近所の焼けあとに沢山居た。彼は平時の幼児募集とは別な臨時『御近所幼稚園』の案内広告を門に出した。と同時に、近所の町会事務所を訪うて、遊び場のない近所の幼児達の来園方を勧説した。又、先生方は炎天下を手分けして、幼児のあるバラックに誘いに出かけたりした。そうして、次第に裸足や半裸体（折から夏であつたし）の子供の群が、戦前のお茶の水幼稚園とは違つた新形相を示した。お茶の水幼稚園は、決して上流階級の幼稚園ではなかつた。又優良幼児の幼稚園ではなかつた。たゞ保育上の理想から定員を限定すると、全都的に入園希望者が多いのと、入園を選択しなければならぬのと、それに志願者の方のいくらかの伝統も手伝つて、自然インテリ両親の子が多く、家庭の生活も躰けも文化的に整つてゐるのが多いのを免れなかつた。そこに何んとなく庶民的（？）でない風もあつたことは、彼れの幼稚園に対する社会想念に、多少一沫の不足を感じしめるところが無いではなかつた。しかしこれは、幼稚園として必ずしも強いて変革をしなればならないことでもなかつたので、いゝ家のいゝ子にのみ、その保育理念を基礎づけるようなことのないように、先生方とも互に相戒めていただけであつた。そうして、文化的有閑家庭に対してよりは、より切迫した保育の必要を日々に実感させられような幼稚園の経営を求めてもいたのであつた。それを戦後、直に彼の着手した此の『御近所幼稚園』において、図らずも実現し得たのである。露骨によつて、これらの顔のよごれたまゝの幼児、服装に意の用いられていない幼児、家庭的躰けのゆき届かない幼児、言語動作も、お行儀の悪い幼児達に、幼稚園というもの社会的法悦（？）を彼と先生方とで満喫したのである。或る若い先生の淑女性は、新来の年少児にオィネエチャンと呼ばれてびつくりした。腕白の年長児の小山の上でのシャークには、彼の紳士性が驚かされた。が、それらは、幼児としての本質に大してマイナスするものではなかつた。それが幼児の天真のプラスだともいえないが、その子らは、たゞ平生の通り幼稚園でも行動したゞけなのである。幼児の生活こそ訓化以前（Pre-training）の無垢だとすれば、そういうことに予め磨きをかけられてゐることが、幼稚園に入る資格という訳でもあるまい。託児所を知り、保育所を知り、農村幼児を知り、漁村幼児を知り、都会のスラムの幼児達を知つてゐる彼としては少しも異としなかつた。けれども、文化的理想の子をのみ相手にし來つた、幼稚園教諭先生達にとつては、如何に貴重の経験であつたことだらう。讃歌すべき子供は、絵にかいたり、人形として愛される子供への礼讃ばかりではない。

殊に此の『御近所幼稚園』が、彼及び先生方に与えた消し難い印象は、結び髪のおふだん着で愛見を迎えに來た母達

の純樸と謙虚と、愛児の先生に対する心からの感謝である。彼は之れ等の暮しに忙しい母達を集めて母の講話会を開催するほど心なしてはなかつたが、往來の店さきや、時々通つてみる露路裏でのゆきずりの挨拶や、幼児を中においての立話にも、どれもこれも、いゝ母親を感じて、如何に心から親しんだことか。

先生方は不便な交通機関に難渋しながら、毎日彼等と嬉々として遊んだ。そうして、保育としては足りないづくめであつたけれども、空襲のおびえと戦火の恐怖と生活物資の欠乏とに干燥し切つてゐる少い魂のためにオアシスとなることを専ら心がけた。彼はあの時の幼児達と同僚諸先生とを、保育者としての生涯中の最も忘れ難い記憶にとどめて貴重するであらう。